

Title	山片蟠桃の「草稿抄」
Author(s)	宮内, 徳雄
Citation	懐徳. 1969, 40, p. 64-80
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90475
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

山片蟠桃の「草稿抄」

宮内徳雄

はしがき

先號（第三十九號）の本誌において、「山片蟠桃と多田義俊」のタイトルで、大阪の町人學者、懷徳堂門下山片蟠桃の一面を、近世諸學者との關係から紹介した。そして、その資料としては、彼のライフワーク「夢の代」、及びその主人重芳の藏書が傳わる「愛日文庫」の若干を利用して、今回は彼が自作の詩文を自ら編輯した「草稿抄」について、その一端を述べてみたい。

この本については、内藤湖南氏が「先哲の學問」中の「山片蟠桃に就て」（大正十年一月懷徳堂講演）で述べられているように、大正五年に偶然その第一冊を入手され、大正十年一月他の二冊も揃えられた。それが現在では、蟠桃の自筆本として最も貴重なものの一つとなつてゐる。内藤氏は又、「それからこの詩文集に關しましては、これも餘程本式に學問を稽古したことを現はして居

る。詩の出來榮えなどは、良く出來たのはその當時の作家と云うてよい位出來て居る。良い詩がざらにあるかといふとさうでない、十首の中に一首位しかないが、良く出來たのは學者並みに立派に作れたものと思ひます。」と述べて、その作品を評價されている。その他、龜田次郎氏はその著「山片蟠桃」の中で、「草稿抄」の項目を擧げて簡単に解題され、有坂隆道・末中哲夫氏も「山片蟠桃の研究」（ヒストリヤ所載）の中で、蟠桃の無鬼・排佛論の一證として、抄中の「入讀記」冒頭と、「與播州覺正寺」「再答覺正寺書」を擧げておられる。こうした先學の業績に對し、甚だ潛越ではあるが、ここに全體を通讀して、いささか蟠桃の人柄に觸れた點を述べる。なお訓讀に誤りがあれば、筆者の淺學に因るものと寛恕されたい。

成立

「草稿抄」中、制作年代の判明する作品の題名を記載順に擧げてみると、次のようである。「〔内は詩文中で年代が推測できる箇所。〕」

一卷

東征行天明五乙巳八月五日發浪華、十七日入京都 一七八五年 天明五
玩月 「我生四十年」 一七八六年 天明六
賦傳法洲正蓮寺後園鶴結巢 「聞說延享紀元甲子歲……到今四十有餘年」 一七八七～八年 天明七～八
奉賀 竹山先生六十 「寛政紀元春欲闌」 一七八九年 寛政元

温泉行 「寛政十一己初秋十九日……」 一七九九年 寛政一

二卷

癸卯元日 一七八三年 天明三
丙午元日丙午元朔午時、有日食一七八六年 天明六

三卷

竹山先生席上恭賦奉呈平島館主源公執事
「夢之代」卷十二に「嘗テ寛政二年戊九月京都ニ入ラントス、浪華ヲ過リ竹山先生ノ講堂ニ謁ス……」とある。
一七九〇年 寛政二

山片蟠桃の「草稿抄」

甲辰元旦憶故郷

一七八四年 天明四

庚子元日今歲余三十三歲故有此感

一七八〇年 安永九

初秋將之但州途中作寛政十一己未

一七九九年 寛政一

四卷

入讀途中作 一七九二年 寛政四
雪江訪人得寒辰十二月望中井即題 一七九六年 寛政八
將之仙臺餞宴舟中留別諸子于時寛政九年丁巳正月二十八日也 一七九七年 寛政九

五卷

跋作州皿山八孝子傳 「寛政庚戌春二月長谷川有躬謹跋」 一七九一年 寛政三
樓総陪游記 「惟癸丑歲仲春」 一七九三年 寛政五

抑樓記 「先生（竹山を指す）年六十二矣」 一七九一年 寛政三

六卷

入讀記 「寛政壬子之歲季春十四日」 一七九一年 寛政三
鷺峯紀行 「寛政庚戌夏四月望」 一七九〇年 寛政二
浴但山記 一七九九年 寛政一

第一・二巻首に「播陽長谷川有躬述」とある（三一六

改山片芳秀

巻には「改山片芳秀」はない）ところから、この「草稿抄」を自ら編輯し終わったのは、すでに指摘されているように、一八〇五年（文化）八月に彼が主人山片重芳から親顔次席に申し付けられ、主家の苗字山片姓を頂いて改名した頃であろうと思われる。従つて安永の終わり蟠桃が三十代の頃から、四十代五十代にかけて仕事の餘暇に作った詩文を、五十代後半に整理編集し終えたものと推定される。

この三十〜五十代は、彼蟠桃自身にとつては、豪商山片家の興亡を一身にない、ひいては仙臺白河以下幾十という雄藩の經濟を掌中に握り、縦横の敏腕を振つたところの、苦難に満ちたしかし充實した年代であつたらう。そうした激職の餘暇に作つたものだけに、花鳥風月に遊ぶ文人や、筆硯にのみ親しむ學者の作品とは、また異つた趣きを持つものと言えよう。

右の中で、最も早い安永九年三十三歳に作つた七言律詩を擧げてみる。

庚子元日 今歲余三十三歳
故有此感

元旦東風萬井烟 迎春斗柄又回天
不妨杯酒如泥醉 偏感光陰若箭傳
四加陸郎懷橘歲 一過顏氏請車年

百齡長執藩邦役 海路山川誰獨賢

（元旦東風萬井の烟、春を迎えて斗柄又天を回る、妨げず杯酒泥酔の如きを、偏へに感ず光陰箭の傳わるがごときを、四たび加ふ陸郎懷橘の歳、一たび過ぐ顏氏請車の年、百齡長じて執る藩邦の役、海路山川誰か獨り賢なる）

注 陸郎懷橘―吳の陸績は、年六歳で袁術にまみえた時、母に遺ろうとして橘三箇を懷中した。

顏氏請車―孔子の弟子顔回は、年二十九歳にして髮盡く白く、三十二歳を以つて卒した。

蟠桃は安永二年に結婚、同七年には男子三藏（後の芳達）が出生した。一方安永元年から升屋を背負つて支配となつて諸藩に大名貸しを行ない、やがて天明初頭からは仙臺藩に直結して「刺シ米」等の商策を驅使することとなる。庚子元日は、この升屋の全盛期を現出する前の野心に満ちた時期であつた。この詩もそうした蟠桃の氣概を示す氣宇壮大なものといえよう。

最も老年である寛政十一年五十二歳の作をあげる。

初秋、將之但州、途中作寛政十二己未

匹馬行裝指但州 殘炎未去使人愁
松風吹落村園夕 曆日猶知山谷秋
池水悠悠過攝野 樹梢鬱々到丹丘

黄昏何寺鳥鐘響 南顧躊躇憶舊遊

匹馬行裝但州を指す、殘炎未だ去らず人をして愁へしむ、松風吹き落つ村園の夕、曆日猶知る山谷の秋、池水悠々として攝野を過ぐ、樹梢鬱々として丹丘に到る、黄昏何れの寺か鳥鐘響く、南顧躊躇して舊遊を憶ふ

注 覺鐘は鐘の異稱。

この旅は、一卷の七言古詩「温泉行」、三卷の七言律詩「湯島即事」、六卷最尾の紀行「浴但山記」と同じ旅である。これらによれば、蟠桃は宿痾の足指の痺をなおすため、但馬の湯島(城崎温泉)に湯治に行ったもので、出發は寛政十一年七月十九日、同行は中原氏、二十三日に目的地に到着した。蟠桃は、この温泉を天下に紹介した後藤良山の門人香川氏の著書「藥選」を携行し、その浴法に従って二十四日から入湯治療した。しかし、二十七日に晝寢をしてから風邪にかかる。

「忽忘教戒、浴衣而臥、宰我氏導我、而入華胥、山中之風、急驚眠而起……」(浴但山記)晝寢を宰我氏と表現するところは、「夢之代」の初稿本「宰我の償」の題名との関連が認められる。

中原氏の看病を受け、八月にはいってようやく風邪もなくなり、同十五日に歸路についた。これが「草稿抄」の最尾である。

山片蟠桃の「草稿抄」

これらから「草稿抄」の編輯について考えると、作品を種類によって分類して六卷にわけ、その中に若干の前後はあるが、大體制作年代に従って並べた點が認められ、寛政十一年の湯島温泉への湯治が最終となっている。作風も年齢の老いるに従って氣負った所が少くなり、落ち着いたものへと變化していったようである。

内 容

草稿抄の内容を一瞥するために、各詩文の題を卷毎に順番に擧げる。(訓點は筆者がつけた。)

卷之一

(五言古詩) 獨酌成詩。送古林君明之尾陽。

奉賀 主人公新居。送子文津田氏之談山。述懷

呈大夫井上君。出塞曲。題難波宮朝貢圖。出塞曲。

又。奉送大鎮堀田侯東旋。送公威山邊君還江都。

(七言古詩) 題豐後州大勝密院、所得蓬萊石。

東方朔贊。咏鼎。東征行。其二。中秋遊石山大觀亭、

不見月。懷德書院燕集、奉送子光木谷氏還備中、

得先。畫虎行。畫馬引題主人公新圖。秋日遊南

都。其二。登笠置山。其三。發笠置山。舟下木津驛。還南

都。過木長州墓。芳山懷古。元日題畫松扇。

中秋須磨浦賞月。玩月。賀山口氏八十八算。賦

傳法州正蓮寺後園鶴結巢。奉賀竹山先生六十。季秋
送下弟季烈之三江都。小林氏之仙臺。菅原氏還中仙臺上
溫泉行。

卷之二

(五言律詩)

祠前梅。琵琶湖遊望。山中避暑。

又。泛江。七夕詞。又。咏落葉。雪中尋梅。

泛洞庭。又。盆中牡丹。送僧還山。

又。又。季夏。家人來。浪華。嬰病。數月

而得愈。仲秋還鄉。回喜賦。賦近水樓臺先得月。

題瓶中紅白牡丹。送佐藤氏之三江都。端午即事。

送三人從軍。益梅。元日早朝。癸卯元日。又。

丙午元日丙午元朔午時。有日食。早秋寄人。兩峯先

生挽詞中邑氏。送弟季烈之三尾陽。夏日早行。題

山水圖。仲秋十三夜逸堂小集。觀獵。春寒。

哭仰齊早野氏。夜泊。浪華早春。思胎堂小集。咏

螢火。老婦嘆鏡。秋日高雄山見楓。未開桃花。

獨酌成詩。遊三河內。其一。譽田廟。其二。千級破古

壘。其三。通法寺源公三世墓。季春。同諸君宴于網

洲。北望憶豬參君在嵯峨。東園六咏。其一。白雲樓。

其二。通仙門。其三。番花塙。其四。醉月亭。其五。養裳臺。其

六。撫松逕。題浪華城內外避暑之圖。二十二首。其一。墨

江。其二。廣田森。其三。天王寺。其四。清水寺。其

五、生玉祠。其六、瑞龍寺。其七、十三嶺。其八、高津

祠。其九、四橋。其十、本願寺。其十一、城畔。其十

二、網島。其十三、浪華橋。其十四、菅廟。其十五、海

門。其十六、妙德寺。其十七、太融寺。其十八、豐林。

其十九、逍遙亭在三番邑。其二十、伊丹。其二十一、

紫雲山。其二十二、箕面山。咏燕得微。又。野

望。從軍行。春夜別友人。早春遊望。望月有

懷。擬公主別莊侍宴應制。挽葛子琴。雪意。

垂絲海棠。冬日遊南郊。題今宮邑蒸湯。夏夜雨。

咏刀。奉寄主人公在馬山。其二。送人之崎陽。

送人之長門。見栲櫻。早行其一。其二。其

三。咏閨月。采蓮曲。中秋賞月。箕山見瀑水。

上岳陽樓。洗心亭落成宴。澄江亭宴集仙台邸也。

勿越關懷古將之仙台。二月廿二日過此。鹿島祠二月十八

日。松島三月五日。

(五言排律) 擬下奉和聖製春日幸東山應制。殿上

月。須磨懷古。送人之豐前。咏史三十六韻。山

家花。洛城早秋。送村上氏之仙臺。

卷之三

(七言律詩)

擬下奉和聖製秋日幸高雄山應制

拜觀今上遷幸新宮。贈琉球正使宜野灣王子。

恭咏双鶴。奉賀岡侯閣下六十初度。恭賀土州侯閣

下四十華誕。奉送府帥堀田紀公東觀。竹山先生席

上恭賦。奉三皇平島館主源公執事。甲辰元旦憶故鄉。

庚子元日。浪華元日。元日寄弟季烈。浪華早春。

田家早春。送谷君歸故鄉。送人遊芳山。又。

奉送主人公之三京師。送人之三南都。送人之三馬山。

送大島君就召之三江都。初冬送曾根君之浦賀。田

代君之三江都。弟季烈之仙臺。送人之三蜀中。擬明

體。送遍照圓上人歸備中。送遠藤中村二君還白

川。奉送竹山先生之三江都。離筵分韻。送人之三松

前。送子文津田君還淡山。雪假山。富士山。

上三多武峯。登三比叡山。芳山懷古。又。題三

山瀑泉圖。九日登三生駒山。九日登高。又。宴三

友人別業。題三兩堤柳下繫舟圖。題三桃源圖。遊三

天王寺。天王寺避暑。中秋石山大觀亭賞月。中秋

泛海。南樓賞月。珠摩赤石賞月。仲秋不見月。

過三友人別莊對雨。卜居篇。賀三古林氏。放鶴。

賀三三浦君六十。老宮人。詠刀。菟川螢火。早起

遊三菟川。赴三赤石舟中作。早春墨江遊望。泛三淡

水。觀海。雪中過三友人別業。不能買書。菊圃。

歲中迎春。移三竹。挽三子厚山中氏。登三三條城樓。

東福寺賞楓。主家園中牡丹時主人公在奧州。寄三豐後

賜子善。井上君來三浪華。喜賦呈上。游三洛陽。新

秋早行。寄三佐藤氏在三江都。季夏浪華橋西泛舟。

人日憶友。奉三賀伯父公八十八算。高津遊望。遙

賀三仙臺菊史翁六十。賦三花下忘歸。仲秋朔。宴三仙

臺邸第。垂釣。咏三鶴。賀三飫肥大夫山田君六十。賀三

永井氏六十華誕。季夏。菅廟祀日即事。遊三天王寺。

見樂。春分後入三奧國。遇雪將之仙台。二月二十二日

入三奧界。鹽竈祠三月五日。上三仙臺城樓三月朔。奉三

送主人公之三仙臺。

卷之四

(五言絕句) 題三枯木寒鴉圖。幼女詞。又。

剪三綵花。又。又。周茂叔贊。聞箏二首。春

曉。題三圭璧圖。題三別業。送人。水邊送別。

贈三友人。畫馬。畫虎。雪竹圖。山水贊。送三

上笠君之三江都。瀑布。柳上燕。上巳。訪三友人。

采蓮曲五首。舟中即事。夏日山中。江亭避暑。

秋園艸花。秋日仙臺邸水樓垂釣。畫馬行。牧童詞。

題三月落雁之圖。蠟燭。高館懷古。三月十三日到三城址

(七言絕句) 秋晴。楓林遇雨。夜愁。春郊

曲。訪三唐津大夫水野君隱三伏水。桃山即事。訪三

僧房。初夏雨中。澗川泛舟。海門泛舟。初夏

陪三柘植氏佐藤氏遊三城和其一木長州墓。其二宿三志貴

山。其二龍田祠。其三春日祠。其四鷲峯山。其五笠置

山。其六菟川浙米灘。入讚途中作其一楠公墓。其二須磨。其三舞妓濱。其四栃本唐。其五尾上祠。其六石室祠。其七曾根松。其八小豆洲。其九屋島。其十象頭山。其十一鹽飯海。其十二吉備津祠。其十三藤戸。其十四瀧野。中秋五日發浪華之東都途中作其一岐岨山中。其二宿熊谷驛。其三能見堂。其四濯首池。其五清見寺。其六瀨多橋。海中十二觀。其一浦松。其二孤島。其三漁村。其四洲声。其五洪濤。其六斷霞。其七輕鷗。其八遠山。其九片帆。其十釣艇。其十一夕陽。其十二晚潮。春日見花二首。夏日山中二首。新井富士此詩之東都其六也。中秋賞月十首。賀井上君來浪華。歸雁。播游雜詩其一須摩。其二曾根松。其三姫路城。俠客行二首。題梅下美人圖。初夏田家。賦水月在手。過禁門。喜雨。咏松。搗衣曲。放雀。牽牛花。春郊。逢俠者。夏日山中。蕉雨。至日宴八百亭二首。瓶中菊。秋盡作二首。漁村夜泊。秋海棠。九日寄弟季烈在江都。北洲吟。將進酒。少年行。閨思。遊子吟。宮詞。玉階螢。瓶中蓮。橋上霜。立春夜宴。望浪華城。宮人斜。江上吟二首。山路賞楓二首。初冬吟二首。元日釣客。華燭引二首。山路見花二首。新秋夜坐。弦月。南臯堂小集呈主人。題

僧壁二首。籬園菊花。雪中野竹。冬夜對雪。月下梅花。送人從軍。從軍行二首。送人之馬山。送菱川君還越州。送梅岸池上氏之雲州。送谷君還鄉二首。歲晚宴集送弓削氏歸日向。水上送別。離筵。中秋宴別上笠君。送人之京。冬夜旅行。秋江送人。送大夫中川君。秋日送人五首。奉送竹山先生遊但州。仲夏送井上鹽山二君還鄉三首。仲秋登葛城山二首。柳塘。和堤君泛江韻。和訪人幽居不遇之作。孟夏泛墨江五首。夏日泛舟十首。霖雨。秋日野望。寄懷友人。寄堤君。憐家弟臥病。訪隱者三首。今宮寓雨中諸君來訪。和豐州鹽山君見寄(三首)。宿田家。夏日飲樓。秋日賞楓。漁村即事。秋月。早秋對雨二首。秋夕吟。秋夜獨坐。大夫中川君歸路過浪華。九日登高二首。十日菊。題別業(二首)。搗衣曲。野梅。咏櫻。春日雜興五首。冬日郊行五首。梅花五首。雨中梅。新荷。題西王母像。杉逕。上巳二首。春郊二首。赴京途中遇雪。歲晚小集。寒夜對雨。浪華早春。奉賀主家伯父大人八十八算二首。孟夏遊網島。觀漲。宴文龍館。田家早起二首。江上聞笛。寄松宇君。夏夜雨。春畝。題獨釣圖。秋夜宴集

送下干梅頼君至^リ自^リ江都^{イデ}尋^ム還^ル藝^ニ。花前對酌。孟夏懷

德堂小集送^ニ千秋頼君還^ル藝^ニ。九日登^ル伊駒山^{イコ}。落^ニ

國學學舍新成^ニ。賀^ス仙臺志村氏桑梓八十七^ニ。雪江

訪^レ人得^レ寒^ニ。辰十二月望^ニ。將^レ之^ニ仙臺^ニ餞^ニ宴舟中^ニ留^ニ別

諸子^ニ于時寬政九年丁巳^ニ。投筆山。桶間懷古。清見

寺。不二山。玉筒關。金原二首。利根川。和^下

蕉園先生在^ニ江戶^一見^レ寄韻^上。

(六言附絶句律排律亦附) 金崎氏小集和^ニ南坡君北洲

吟韻^ニ。題^ニ山水春曉圖^ニ。和^ニ子節藤田氏墨江途中韻^ニ。

烏夜啼。瓶中松。從軍行三首。題^ニ僧壁^ニ二首。

初夏訪^ニ金寄氏^一。

卷之五

(序跋) 擬^ス送^ニ遣唐使^ニ序^上。送^ニ中山使^ニ野灣王子^ニ

序。送^ニ梅岸池上氏^ニ雲州^ニ序。仙臺木村氏都土產

序。跋^ニ作州皿山八孝子傳^ニ。

(記) 游^ニ高津^ニ記。樓船陪游記。紫芝窩記。

三奇亭記。抑樓記。四水館記。夢登^ニ不二山^ニ記。

(論) 有教無類論。伍子胥鞭^ニ平王之尸^ニ論。

范睢論。問樂毅^ニ。問武王^ニ。

(說) 放龜說。紙說。

(辨) 王霸辨。

(甲文) 甲^ニ楠正行^ニ文。

(紀事) 記^ニ虎餘新左衛門事^ニ。記^ニ毛利元就諫^ニ大

内義隆^ニ事^上。記^ニ篠原戰^ニ。記^ニ雄略帝獲^ニ百猪^ニ皇后諫

言^上。記^ニ獲良王据^ニ吉野山^ニ事^上。記^ニ竹中重門事^ニ。記^ニ

月岡左膳事^ニ。記^ニ米田氏忠義事^ニ。記^ニ大久保忠世即智

之事^ニ。記^ニ直江兼繼之事^ニ。記^ニ東照宮陷^ニ泥淖^ニ之事^上。

記^ニ三方原戰^ニ。記^ニ六左衛門僕權助事^ニ。偽狐新語。

記^ニ尾關石見事^ニ。永井好古智足錄跋。

卷之六

(紀行尺牘) 入讀記。北河行。南河行。元旦

與^ニ弟季烈^ニ書。與^ニ播州覺正寺^ニ書。再答^ニ覺正寺^ニ

書。擬^ニ皇子護良獄中上書^ニ。浴但山記。

以上、蟠桃自身が分類編輯したもので、その数は、五

言古詩11題11首、七言古詩19題22首、七言律詩85題88首、

五言絶句34題43首、七言絶句152題235首、六言附8題11

首、詩の合計388題528首、序跋5篇、記7篇、論5篇、説

2篇、辨1篇、甲文1篇、記事16篇、紀行尺牘9篇、文

の合計46篇である。

卷之一巻頭の詩を次にあげる。

獨酌成詩

遲日芳艸稠、四望正悠々、雖有一陶酒、地僻絶交游、把

杯誰與談、乘醉獨自謳、無客惱孔融、對影憶李白、一斗

雖自傾、深慚詩三百、(遲日芳艸しげり、四望正に悠々、

一陶酒有りと雖も、地僻にして交遊を絶つ、杯を把りて誰とともにか談せん、酔ひに乗じて獨り自ら謳ふ、客無くしては孔融を惱み、影に對しては李白を憶ふ、一斗自ら傾くと雖も、深く慚づ詩三百)

注 蒙求「後漢孔融……及退閑職、賓客日盈門、常歎

曰、坐上客恒滿、樽中酒不空、吾無憂矣」

李白、月下獨酌詩「舉杯邀明月、對影成三人」

この詩を巻頭に掲げた蟠桃の眞意は、果してどこにあったのであろうか。孔子が詩經三百余篇を指した語になぞらえたこの中の「詩三百」が、あとに續く自作の詩を指すとすれば、彼蟠桃の、この詩文集に對する並々ならぬ自負心を看取することができる。即ち、自分自身の居る場所を僻陬の地とみたて、眞に語り合ふべき友を持たぬことを嘆き、後漢の孔融が閑職に退いても坐上に客が常に滿ち、樽中に酒が空しくなかつたことを羨やみ、ひとり我が影にむかつて李白の如き友を持ちたいと願っているとこの詩を解した時、彼の自分の學問人徳を孔融に、詩才を李白にも比した絶大な自信を見ることが出来る。

さてこの「詩文抄」の詩の題材となつてゐるものを分類してみると、景物31%、送別訪問15%、紀行13%、即事11%、感慨6%、故事懷古6%、題圖6%、賀4%、人に寄せる3%、人物2%、挽詞1%、應制1%、其の

他になつてゐる。その中、感慨については元日の所懐を述べたのが9題ある。故事懷古については、日本よりむしろ中國に關する方が多いのが目につく。紀行は「卷之六」の紀行文に付隨したものが多く、避暑の詩も11題ある。今も昔も變わらない大阪の夏の耐えがたい暑さに、蟠桃も餘程弱つたのであろうか。例えば小西來山が「涼しさに四つ橋を四つ渡りけり」とよんだ四つ橋について、卷之二「題浪華城内外避暑之圖、二十二首」中に次の詩を載せてゐる。

其九、四橋

奠水支流衆 縱橫連四梁

倚欄臨夜月 下岸覺秋涼

人去南街外 山連北斗傍

披襟煩熱解 西向憶瀟湘

(奠水支流おほし、縱橫四梁を連ぬ、欄に倚りて夜月のぞみ、岸に下りて秋涼を覺ゆ、人は去る南街の外、山は連なる北斗の傍、襟を披けば煩熱解け、西向して瀟湘を憶ふ)

注 奠水——どこおつた川の意から淀川を指す。臨——望の意か。瀟湘——洞庭湖に注ぐ、瀟湘八景の名勝。

かつて交叉した二つの川が、地下駐車場と高速高架道路と化した今日のありさまを見れば、蟠桃は果してどんな

詩を作るであろうか。

叙景の詩には次に擧げるような月に關するものが多
い。勿論自然科學・文學の對象としての月ではなく、
花鳥風月の月として鑑賞しているのが、科學的合理主義
者の蟠桃としては面白い。

卷之四「中秋賞月十首」中の第九首

秋色蕭々玉兔寒 雲開星少照林巒

中庭舉首江山靜 把酒邀歡坐閨闌

(秋色蕭々として玉兔寒し、雲開き星少くして林巒を照
らす、中庭首を擧ぐれば江山靜かなり、酒を把りて邀歡
す坐間の闌)

注 玉兔―月の別名、月の中にうさぎがいるという傳説に基づ
く。林巒―林と山、吳偉業初冬月夜過子儼詩「月色破林巒」

人間關係

蟠桃の交友關係については、從來の研究の中で必ずし
も明確にされていない。龜田次郎氏もその著「山片蟠
桃」の中で、「蟠桃翁の詩文集『草稿抄』や其他の著述
に多くの人名が見えてゐるが、左したる人も無い様であ
るから、凡て省いていはぬ」と述べていられるが、この
「草稿抄」の中から少し注目すべき人名を探ってみる。

「草稿抄」の中の人名中で、蟠桃と同時代と見られる

山片蟠桃の「草稿抄」

人物を回数の多い順に書きぬいてみる。7回弟季烈(與
兵衛)、6回主人重芳、5回中井竹山、3回井上(大夫)、
柘植(與一右衛門・新右衛門)、2回古林(醫者)、津田
子文、堀田侯、佐藤、琉球正使宜野灣王子、岡侯、谷
主家伯父、永井好古、池上梅岸、中川雀治郎(大夫)、
鹽山、堤(醫者)、頼千秋(春水)、金崎、播州覺正寺門
隨師、1回山邊公威(醫者)、木谷子光、山口與十郎、
小林、菅原、中邑兩峯、松平新助(丹州龜山之大夫)、
葛子琴、村上、土州侯、平島館主(足利義根)、大島
曾根、田代、遍照圓上人、遠藤、中村、三浦(醫者)、
山中子厚、脇子善、山田(飢肥大夫)、上笠、水野(唐
津大夫)、谷川(南臯堂)、菱川、弓削、井上、松宇、頼
梅颯、志村(仙臺)、中井蕉園、南坡(北州)、藤田子
節、木村(仙臺)、萱野、三藏(息子芳達)、篤(外祖
父)、西光寺、高谷、兄(安兵衛)、中原、中井履軒、黑
崎文仲、黑崎正平、赤巖、牧、源(僕)。

最も回数の多い弟季烈とは與兵衛のことで、彼も亦升
屋に勤め、仙臺・江戸に出張して蟠桃の片腕として働い
たが、不幸寛政十二年に五十歳に達せずして江戸で亡
くなったことは、すでに有坂・末中兩氏によって指摘され
ている。「草稿抄」に載せられている詩は、旅を送るも
のが3、元日に寄せるものが1、江戸に在るのに寄せる

のが1、病に臥しているのを憐んだのが1の計6篇であつて、いま一つは元日に與えた書である。そのひとつを擧げると、

憐家弟臥病 (卷之四)

蕭然茅屋有誰尋、家弟平生惜寸陰
不識斯人兼持疾、莫愁廉直丈夫心

(蕭然たる茅屋誰か尋ぬる有らん、家弟平生寸陰を惜しむ、識らず斯の人兼ねて疾を持するを、愁ふる莫かれ廉直丈夫の心)

自分の身代わりとなつて江戸・尾張・仙臺等に出向し、主家のためにつくして病を得た肉親の弟に對するいつくしみの氣持ちが表われている。

主人重芳については6回でてくるが、幼時から父親代わりとなつて哺育した主人に對する父性愛にも似た愛情が、次の詩にも感じられる。

主家園中牡丹時 (卷之三)

主人在奥州

主人未返向誰開 無奈晚春時自來

先認堂前紅一捻 更誇園裏錦千堆

粉光百步天香滿 妖艷三更曙色催

誰君醉中休折取 家庭平日費栽培

(主人未だ返らず誰に向ひてか開くや、晚春時におのづから來るをいかんともすることなし、先づ認む堂前紅一

捻、更に誇る園裏錦千堆、粉光百步天香滿ち、妖艷三更曙色催す、誰が君か醉中折取するをやめよ、家庭平日栽培に費す)

主人丹精の牡丹の盛りを、その主人に見せられないのを惜しむ忠義な番頭としての至情が、文字の底に潜んでいる。

升屋家は天明四年火災にかかり、堂島から梶木町に轉居したが、それについて次の詩がある。

奉賀

主人公新居 (卷之一)

初自宅堂洲、四世凡百秋、不料羅煨燼、舉家水南投、幸ト十弓地、名曰掛木街、城中寸金土、里仁風俗佳、雖依鵝巢室、土木稍々起、移松又栽花、金鱗浮池水、鴉宿童閉庫、鸚鳴奴開門、設爐欲煎茗、市中喜不喧、治世四民業、大都勢壯哉、請君安苟合、慎勿問玉杯、

(初め堂洲に宅せしより、四世およそ百秋、料らず煨燼に罹り、家を擧げて水南に投ず、幸に十弓の地をトし、名づけて掛木街(梶木町)といふ、城中寸金の土、里仁風俗佳なり、鵝巢の室に依ると雖も、土木稍々起る、松を移し又花を栽え、金鱗池水に浮ぶ、鴉宿りて童庫を閉ぢ、鸚鳴いて奴門を開く、爐を設け茗(茶)を煎らんと欲す、市中喧しからざるを喜ぶ、治世四民の業、大都の

勢壯なるかな、請ふ君苟合きまうごうに安んぜよ、慎みて玉杯を問ふことなかれ)

この時蟠桃は三十七歳、主人重芳は二十一歳、多難であった升屋の家運もこの新築後次第に立ち直りを見せる頃であった。主家の沿革を述べるとともに、若き主人になお一段の戒心をねがう衷心がにじみでた詩であると言えよう。

蟠桃の詩には、中國等の故事・成句を引用したものとや形式的な修辭法が多く、又同じ文字や語彙の多用が認められ、全般にやや理屈っぽい感じを受けるのであるが、さすがに肉親や主人に寄せるものには、おのずから恩愛の情のあふれた人間性がにじみでて、讀む人の心をうつものがある。蟠桃には前記三藏の上に、りゅう・ことの二女があったこともすでに明らかにされているが、次の二つの絶句は彼女らについてであろうか。

幼女詞 (卷之四)

未知室四方 嬌痴坐閨房
隨母開明鏡 慇懃學晚粧

(未だ室の四方を知らず、嬌痴閨房に坐す、母に隨ひて明鏡を開き、慇懃に晚粧を學ぶ)

又

女兒五六歳 巧拙未可知

山片蟠桃の「草稿抄」

唯懷小木偶 頻作愛憐詞

(女兒五六歳、巧拙未だ知るべからず、唯小木偶を懷き、頻りに愛憐の詞をなす)

「夢之代」等ではみられない彼の妻子に對する愛情を、ここにうかがうことができる。

從來蟠桃との關係ではあまり注目されなかつた著名な文人の名が、「草稿抄」の中にいくつかみられる。次にその幾人かを擧げる。

葛子琴は、大阪の醫者橋本龜庵とのことで、本姓葛城、子琴は字である。菅甘谷・兄藥郊に師事し、祇園南海の詩風を好んだ。混沌詩社に入って文名が揚がり、竹山とも交友があつたのは有名である。天明四年五月七日に没しているが、蟠桃は次の挽詞を作っている。

挽葛子琴 (卷之二)

天何奪名士 蕭索讀書臺
李杜詞章歇 扁倉方術灰
九原埋寶樹 一世惜奇才
友生長別淚 流到玉江隈

(天何ぞ名士を奪ふ、蕭索たり讀書の臺、李杜の詞章歇き、扁倉の方術灰たり。九原寶樹を埋め、一世奇才を惜しむ。友生長別の淚、流れて玉江の隈くまに到る)

注 李杜—李白・杜甫。扁倉—扁鵲・倉公・昔の名醫。九原—

墓場。

頼春水は混沌社中最も竹山に親しく、その廣島藩儒となつたのも竹山の勧めによるといわれるが、蟠桃も亦、千秋（春水）梅颯夫妻のために次の詩を作っている。

秋夜宴集送千梅頼君至自江都尋還藝（卷之四）

燕土千程藝又遙 秋天守去任風潮

知君衣錦趨庭日 彩筆翻々雲外飄

（燕土千程藝又遙かなり、秋天守去風潮に任ず、知る君が衣錦趨庭の日、彩筆翻々として雲外に飄へるを）

注 趨庭―子が父の教を受ける喩、春水の父享翁は藝州竹原に住んでいた。

孟夏懷德堂小集送千秋頼君還藝州（卷之四）

華府薰風停玉鞍 把杯今夜磬君歡

可知故國趨庭日 畫錦添光人盡看

（華府の薰風玉鞍を停め、杯を把つて今夜君が歡びを罄す。知るべし故國趨庭の日、畫錦光を添へ人盡く看ん）

脇愚山は豊後の人で字は子善、天明七年大阪に來て竹山に師事した。その西に歸る時、竹山は序を作つて送り、竹山の逸史が成つた時、愚山は之に序を作っている。熊本藩儒となり、時習館の教授となつたが、母に孝養をつくすために鶴崎に退いて教授した。その門から帆足萬里が生まれた。白河樂翁が曾つて竹山に門下の高足

をたずねたが、竹山は丸川松陰とこの愚山の二人の名を答えている。蟠桃は卷の三に次の詩を載せている。

寄豊後脇子善

書信寂寥豊後州 三春分手思悠悠

城中未廢文章會 巖下何妨麋鹿遊

時倚高樓繙魯史 或開古匣攬吳鈎

憶君良夜迎明月 東望千山慰舊愁

（書信寂寥たり豊後の州、三春手を分ち思ひ悠悠、城中未だ廢せず文章の會、巖下何ぞ妨げん麋鹿の遊、時には高樓に倚りて魯史を繙き、或は古匣を開きて吳鈎を攬る、憶ふ君良夜明月を迎へ、東のかた千山を望みて舊愁を慰めんを）

注 吳鈎―刀劍の名。

遠くはなれた同門の秀才に對する友情にあふれたもので、この時は蟠桃も自分が町家の一番頭という身分を忘れたであろう。二人の間の親密さを推測することができる。

京都の中村兩峰は竹山の門人で、履軒の妻の兄になり、履軒もしばしば春水等と共にその家で酒を飲んだ。蟠桃はそれに次の挽詞を作っている。

兩峯先生挽詞中邑氏（卷之二）

花落空埋玉 終身業已灰

篋中遺稿滿 几上健毫摧

友嘆修文促 師稱短命哀

孤魂招不返 凄惻思難裁

(花落ちて空しく玉を埋め、終身業已に灰たり、篋中遺稿滿ち、几上健毫摧く、友は修文の促を嘆じ、師は短命の哀を稱す、孤魂招けども返らず、凄惻として思ひ裁ち難し)

注 修文—文人の死。書言故事「挽文人死言修文地下」

「夢之代」の内容と關連するものとして次の二つがある。

哭仰齋早野氏 (卷之二)

鄒魯無窮業 嘗從事於斯

名存大手筆 任重一龍兒

堪嘆連城壁 化爲墮淚碑

游魂招不得 望々亦何之

(鄒魯無窮の業、嘗つて斯に從事す、名は存す大手筆、任重し一龍兒、嘆くに堪へたり連城の壁、化して爲る墮淚の碑、游魂招けども得ず、望々亦いづくにか之)

注 鄒魯—孟子、孔子の生地から孔孟の學をいう。

大手筆—國家の重要な文章。連城壁—名玉の名。

墮淚碑—石碑の名

山片蟠桃の「草稿抄」

早野仰齋は名を辨之といい、家は藥屋であつた。早く母をなくして父とくらし、父は商賣より學問に身を入れた。仰齋も學問に專念して懷德堂の助教となることができたが、惜しくも早世した。蟠桃は「夢之代」卷十二に、

「早野辨之、字ハ子譽、永輔ト稱ス篤行ノ人ナリ、父藤太郎命ジテ竹山先生ニ就テ學バシム、二三年ノ後藤太郎來リテ先生ニ謁シ、永輔ノ業ノナルベキヤト問、先生曰、子必憂フルコトナカレ、永輔ヨク學ブ一生貧ナルコトウケ合ベシト、藤太郎頓首シテ曰、先生ノ恩忘ルベカラズトア、コノ父アリテ此師アリ、業ノナルヤ宜ナリ、ソノ子義三亦宏才ナリ」と述べている。

足利將軍の後裔義根が、蜂須賀侯と確執し、阿波平島を追われて畿内を流浪しているのを傷んだ詩が「草稿抄」卷之三にある。

竹山先生席上恭賦、奉呈

平島館主源公執事、公足利氏、爲公方義榮之孫、在阿州 故曰、阿波公方

公孫文物豈虛名 一夕偶然臨府城

坐列摠衣三碩老、中井・赤崎・尾藤三先生同在堂 趨陪執飲一狂生

舊新郁々芝蘭契 出處紛々水石盟

劍佩從容難得侍 龍門風雨李家情

(公孫文物豈虛名ならんや、一夕偶然府城に臨む、坐列衣を纏ぐ三碩老、趨陪飲を執る一狂生、舊新郁々たり芝蘭の契、出處紛々たり水石の盟、劍佩從容得て侍し難し、龍門風雨李家の情)

この詩は「夢之代」に載せた唯一の自作の詩であり、その後義根から贈られた和韻の詩を續けて、「夢之代」本文の最尾としている。蟠桃としても最も自信のある作品で、しかもこの席に同席したことが、彼にとつても生涯の晴れがましい記憶であつたのかも知れない。公孫(宗室侯王の孫)・李家(唐の天子の家)という最大級の辭を用いている所にも、蟠桃の當時の心境が察せられる。

その他

卷之五、卷之六は文集である。その中で特に蟠桃の思想の特色である排佛論に關係ある覺正寺の門隨師にあつた二通の手紙は、すでに内藤湖南氏によつて指摘され、有坂・末中兩氏によつて紹介されたのでここでは觸れないが、紀行や詩の中で、楠氏一族の忠節や、大塔の宮の苦衷、木村長門守の武勇を讃える所などは、蟠桃もいちがいに冷酷無情の合理主義者・實利主義の經濟家とのみ割り切るこのできないものを感じさせる。

蟠桃の詩の中で酒を取りあげているものが非常に多いが、彼の酒量は果してどうであつたらう。卷之六に、
南河行「此行也、蕪酒四升、到此纔留一瓶、故沽村酒以補之、君嗜酒、其量較少、佐藤生酒仙也、牧氏亞之、余劣也又甚焉、咸醉矣、君又燒麴耐、強之、亦盡矣」
(此行や、酒を齎らすこと四升、此に到りて纔かに一瓶を留むるのみ、故に村酒を沽ひ以つて之を補ふ、君(柘植)は酒を嗜む、其量やや少、佐藤生は酒仙也、牧氏之に亞く、余の劣るや又甚だし、咸醉ふ、君又燒麴を携へ、之を強ふ、亦盡くるなり)

鷲峯紀行「此行也、二土酒客也、吾食客也、其每投驛舍、吾喫飯、則二土先飲酒、雖然酒肴共乏、囊中雖有錢、無可沽之酒、已有則薄酒、而不能下咽、嗚呼窮矣哉
二土、而吾則意氣揚々矣」

(此行や、二土(柘植・佐藤)は酒客也、吾は食客也、其驛舍に投ずることに、吾飯を喫すれば、則ち二土先づ酒を飲む、然りと雖も酒肴共に乏し、囊中錢ありと雖も、沽ふ可きの酒なし、已にあれば則ち薄酒にして咽を下す能はず、嗚呼窮せるかな二土、而して吾は則ち意氣揚々たり)

浴但山記「履軒先生嘗戒曰、浴中善飯、食味美也、慎而勿貪焉、故余朝飯三盂、其餘二盂、減肉禁酒、僕源、

嗜酒、不耐禁、而數勸酒、中原氏亦曰、用一盞而就寢則能眠、試之、果然、亦不可全廢也」

(履軒先生嘗つて戒めて曰く、浴中は善く餒う、食味美なり、慎みて貪る勿れ、故に余朝飯三盃、其餘二盃、肉を減じ酒を禁ず、僕源、酒を嗜む、禁に耐えず、而してしばしば酒を勸む、中原氏亦曰く、一盞を用ひて寢に就けば則ち能く眠ると、之を試むるに、果して然り、亦全くは廢すべからざる也)

これらをみれば、蟠桃は、酒量は多くないようではあるが、必ずしも酒が嫌いというわけではなく、やはり事にあたっては酒がなければさびしいという感じである。

先號に載せた「山片蟠桃と多田義俊」の中で、「蟠桃」という號の由來について觸れたのであるが、それに關係したことを少し補ってみる。「詩文抄」や「夢之代」では「播陽」、「宰我の償」や藏書印には「蟠桃」の號を用いているのはすでに述べたのであるが、この「詩文抄」の中では次のことが載っている。

甲辰元旦憶故郷 (卷之三) の中
華府柳梅方欲發 播陽松栢更何如

(華府の柳梅まさに發かんと欲し、播陽の松栢更にいかん)

注 華府—大阪を指す。

甲辰は天明四年で蟠桃三十七歳である。この「播陽」はいうまでもなく生まれ故郷播州の意に使っている。従つて播陽の號も生まれ故郷からとつたものであろう。又、

東方朔贊 (卷之一)

鼎湖屈指五千年 栢梁星霜只二千

此翁即今何處在 金母曾說九千歳

(鼎湖指を屈す五千年、栢梁星霜只二千、此翁即ち今何處に在りや、金母曾つて説く九千歳)

注 鼎湖—黃帝が鼎をつくつて上仙した地。

栢梁—漢の武帝が築いた台、群臣に詩をつくらせた。

題西王母像 (卷之四)

崑崙山上閩風宮 華夏西方天竺東

桃實三千年後熟 周王漢帝往來通

(崑崙山上閩風宮、華夏の西方天竺の東、桃實三千年後熟す、周王漢帝往來通す)

注 閩風—仙人のいる所。

これは先號にも引用した「漢武故事」の「東郡獻短人、呼東方朔、朔至、短人因指朔謂上曰、西王母種桃、三千歳、爲此子、兒不良也、已三過偷之矣」(淵鑑類函三九九) の故事をふまえて作つた詩である。桃實即ち西王母の蟠桃を三度ぬすんだ東方朔は、九千年の長壽を得ているはずだから、今もどこかに生きているだろうと

いうふうはこの傳説を解釋している。そして自分自身を「桃」と任じていることも、同じ「草稿抄」の次ぎを見ればわかる。

元日與弟季烈書（卷之六）の中

三人同胞天倫之身、梅發于西播、柳芽于東武、唯桃在于浪華、而未萌、

（三人の同胞は天倫之身なり、梅は西播に發ひびき、柳は東武に芽やむ、唯桃は浪華に在りて、いまだ萌ひびえず）

注 天倫―兄は先で、弟は後の如き天然の倫次。

梅―兄安兵衛（郷里播州神爪）を指す。

柳―弟與兵衛（江戸）を指す。

號の「蟠桃」はただ番頭という身分をもじっただけでなく、その語の持つ種々の意味と、彼蟠桃自身の複雑な心理を内包したものである。これらからも推測されるのである。

この「詩文抄」を通じての蟠桃の見方には、まだまだ不十分な所があり、資料の引用・訓讀にも遺憾な點が多いと思われませんが、いずれも私の淺學によるものと御寛恕を願うと共に、他日の完璧を期して擱筆します。